

国語科教材「ごんぎつね」についての素材研究

—子供の疑問に応えるための作者・作品内容の比較・検討—

森田 弘行

抄録：新美南吉の「ごんぎつね」は、現在小学校4年生の国語の教科書にすべて掲載され、数多くの授業実践が行われている。しかしながら、子供たちが教科書で学んでいる「ごんぎつね」は、草稿の「権狐」と、同じものではない。なぜなら、教科書に掲載されている「ごんぎつね」は、鈴木三重吉の添削によって、大幅に改変された「ごん狐」とほぼ同じものだからである。そこで、本論文では「ごんぎつね」「ごん狐」「権狐」の三つの作品を比較、検討しながら、子供の素朴な疑問に焦点を当て、教師に必要な素材研究について論じた。また、新美南吉の生い立ちや生まれ育った愛知県半田市岩滑の地域社会における伝承や歴史などにも言及しながら論を展開した。

キーワード：新美南吉，素材研究，並行読書，言語活動

1. はじめに

「ごんぎつね」は、平成元年から小学校4年生のすべての国語教科書に掲載されている。北海道で使用されている二つの教科書では1971年に光村図書が、1977年からは教育出版の教科書にもこの「ごんぎつね」が登場したので、本学科の学生の大半は「ごんぎつね」を学習しているはずである。現在、各教科書に掲載されている新美南吉作の「ごんぎつね」は、赤い鳥の創刊者として名高い鈴木三重吉による大幅な添削後の作品であることは広く知られているが、この添削には賛否両論がある。「三重吉のごんに比べれば、南吉のごんは人物が小さく、行動が狭く魅力に乏しい」と佐藤通雅(1970)が三重吉の添削後の作品に軍配をあげれば、一方で木村功(1999)は、三重吉の添削は「当時の社会情勢(部落有林の国有化による猟師の廃業など)の光景や口伝的要素、地域色(方言の標準語化など)、文学的表現が失われた」と指摘している。また、南吉研究家の大石源三氏も「話の筋は変わってないが、方言や呼び名などが直されています。原文は、若いという感じですが、私たちにはその原文に親しみが持てますね」と語っている。そして新美南吉研究で名高い、かつおきんや(2015)も、「南吉の『権狐』草稿に書かれ、三重吉によって削除されたいくつかの文言(例えば、徳川様や若集倉)は、消えつつあった貴重な民俗口誦資料を一つ後世に遺したのに、その語句が消されたことに対して南吉は少なからず残念に思ったとも考えられる」と南吉に同情を示している。

国語における物語教材としてみた場合、確かに三重吉のそれは、非常に平易な文体と表現で綴られ、4年生の子供たちにとっては学びやすく、共感しやすいものになったことは間違いない。だが、知多郡半田市辺りの方言が味わい深く作品に反映されている原文もまた捨てがたい作品であり、子どもたちの興味関心を引く描写が随所にあるため、並行読書として扱うことは可能であろう。実際、教科書の「ごんぎつね」と草稿「権狐」との比べ読みを対象を絞り、読みの発達を意図した小川高広(2019)の試みや南吉オリジナル版「ごんぎつね」を制作し、自らも教科書の「ごんぎつね」と「オリジナル版ごんぎつね」を比較読みをおこなった岩下修(2013)の授業実践などが知られている。

そこで本稿では、筆者の「ごんぎつね」授業実践を含め、これまで数多くの国語の教師が行ってきた「ごんぎつね」実践の中で、子供たちが素朴な疑問として発した教師への問いかけを素材研究の視座で解明していく。また、物語にまつわる謎を解くための情報が、より多く盛り込まれている南吉の草稿である「権狐」と三重吉が添削した「ごん狐」さらには国語の教科書に掲載されている「ごんぎつね」を対比させながら論を進めていきたい。

(*以下、草稿は「権狐」、赤い鳥に掲載されたものを「ごん狐」、教科書に掲載されているものを「ごんぎつね」と表記する。)

2. 素材（作者・作品）研究の重要性と並行読書

現在の国語科学習指導要領及び来年度から実施される新学習指導要領（平成29年告示）では、単元計画を構築していく上で言語活動の充実を図るための並行読書が推奨されている。教材によって様々なタイプの並行読書があろうが、一般的なものは、やはり同じ作者の作品群にふれることだろう。特にこの「ごんぎつね」は、南吉自身の原風景や幼少期に死別した母親への愛着、思慕の念が、作品に色濃く反映されている。佐藤（1970）は、南吉の作品は「実母を亡くした4歳の時、生涯を通じた薄幸への出発点となった」と述べているが、程なく父親は再婚し、弟が生まれる。物心が付き始めた幼少期に十分な愛着形成が出来なかった南吉は、さらに8歳のとき、祖母の家に一人養子に出

◆南吉の生育歴

- 1913年（大正2） 愛知県半田市に生まれる。
- 1917年（大正6） 4歳の時実母死亡。
- 1920年（大正9） 田第2小学校入学
- 1921年（大正10） 母り糸の継母「新美志も」の養子となる。
- 1926年（大正15） 県立半田中学校入学
- 1929年（昭和4） 文学に興味を持ち、同人雑誌「オリオン」を発刊する。
- 1931年（昭和6） 18歳の時に岡崎師範学校を受験するも身体検査で不合格となる。「権狐」を「赤い鳥」に投稿。半田第2小学校の代用教員となる。
- 1932年（昭和7） 東京外国語学校英語部文学科に入学。
- 1938年（昭和13） 県立安城高等女学校教諭に就任。
- 1942年（昭和16） 第一童話集「おじいさんのランプ」を編む。
- 1943年（昭和18） 遺言の手紙を巽聖歌に送る。3月22日咽喉結核のため永眠（30歳）。

◆主な作品

- 「でんでんむしのかなしみ」「赤いろうそく」「おじいさんのランプ」「てぶくろをかいに」「ごんぎつね」「正坊とクロ」「花のき村と盗人たち」

されるのである。発達上、幼少期、児童期は完全には母子分離が済んではない。南吉がどれほどの孤独と淋しさを抱えていたかは想像に難くない（佐藤1970）。そのため、南吉が自身を「不幸者」とよぶ屈折した思いを投影させた作品は少なくない。素材研究は、まず作者や作品の調査、検討から行うべきだと筆者は考える。作者の生い立ちから、童話作家になるまでのプロセスを知ること、物語に込められた作者の思想、動機、願いなどが自然と浮かび上がってくるはずである。また、他の作品群を読み比べていくうちに読みは重層的となり、多角的な読みが可能となるだろう。

したがって、「ごんぎつね」を学び読み進めていく時、南吉の孤独を抱えた哀しみを4年生なりに感じ取れるであろう「でんでんむしのかなしみ」や、きつねの親子の情愛が心に沁みってくる「てぶくろをかいに」などは、ぜひ並行読書として読ませたい作品である。

教師が「ごんぎつね」の単元構成を通して言語活動を充実させていこうと考え、作者、作品研究な

どの素材研究を行っていけば必然的に「なぜ、南吉の作品の多くに、きつねが登場するのだろう」「なぜカラス、たぬき、でんでんむし、犬などの生き物を擬人化させるのだろう」「ラストシーンで死を予感させる作品が多いのはなぜだろう」と立ち止まって考えるに違いない。近年、物語教材の一単元当たりの指導時数がかなり少なくなったことで、教師は教科書のみ教材研究と言語活動にばかり腐心している感がある。しかしながら、作者（南吉）の生い立ちを調べたり、他の作品を読み比べたりする素材研究のプロセスから得た知見は、「ごんぎつね」授業に深みを与えるだろうし、並行読書は、授業での学びをさらに深化、発展させていくのに有効な手段の一つであると考えられる。

3. 子供からの素朴な疑問

「ごんぎつね」を学習していくと、子供たちは徐々に「ごんの世界」に入り込んでいく。そして、深く入り込めば込むほど、素朴な疑問をつぶやきはじめる。もちろん、その幾つかは、授業の課題や教師の発問となって子供にフィードバックされる。これまでの「ごんぎつね」実践において見聞きしたその素朴な疑問を幾つか紹介してみる。

- 「ごんぎつね」のごんはどんな意味。
- この時代はいつ頃なのかな。
- 張り切り綱ってどんな綱なのかな。
- ごんぎつねの棲む山里はどこにあるの。
- なぜ、ごんは一人ぼちななの。
- お母さんはいないの。
- なぜ、ごんはいたずらばかりするの。
- ひがん花ってどんな花なの。
- お歯黒ってなに。
- 白い着物を着たそうれつって昔のお葬式のことなの。
- 兵十の家には鉄砲があるけど獵師なの。

教師には即答できないものも、いくつか散見されるが、例え深く教材研究や素材研究をしたとしてもそのまま伝える必要はない。ただ、「時代がわかる手がかりはあるかな」「張り切り綱ってどんな綱か知ってる（写真を見せる）」などと、授業の流れの中で、適宜子供たちに情報を小出しにしながら与えればよい。おそらく、何も素材研究していなければ、「どうしてだろうねえ」「先生も分からないな」と軽く流してしまうことになってしまうだろう。もちろん、前述したように教科書の「ごんぎつね」とオリジナル版の「権狐」を読み比べしていく授業も考えられるが、筆者は、「ごんぎつね」の授業で出てきた子供の疑問を、ある時は取り上げ想像し合ったり、またある時は教師が行った素材研究の知見を提示するに留めおいたりする方が子供の想像力を掻き立てるのではないかと考えている。

4. 題名である「ごんぎつね」の由来はどこから

子供からの素朴な疑問に答えていくためには、まずは題名の由来から素材研究していくことになる。

現在、「権狐」という表題の由来は諸説あるが、主なものは三つある。ごんぎつねの舞台である愛知県半田市には権現山があり、地元の人たちの多くは、権現山に棲むきつねから、ごんぎつねという題名にしたのだろうと考えているようだ。童謡「たき火」の作詞者として有名な巽聖歌は、当時、権

現山（『ごんぎつね』）にも、ろっかん山（『和太郎さんと牛』）にも、鳥根山（『狐』）にも至る所に狐は棲息していたのだろうと、この説を支持している。また、佐藤（1972）は、この説と合わせて南吉の友人である中山文夫の話として、「岩滑（いわなめ）村の西の山の中の盆地にある小村、大興寺村の「ごんぎつねの逸話」も紹介している。中山氏は「その村には「鐘つき池」があり、夕風が吹き始めると、池の底から〈ゴーン、ゴーン〉と鐘の音がした。村人はこの音を、狐の打つ鐘の音だと考え、その狐を〈ごんぎつね〉と呼んでいたと言い伝えてきた」と語っている。

柴田哲谷（2012）は、権の字の意味に着目し、「権狐」を「ゴンギツネ」と読むことは、例え昭和初期の人々といえども（まして子どもであればなおさら）容易であったとは思えないと指摘している。しかしながら、南吉がゴン（権）の存在を自身と投影同一視していると考えれば、そこに「権狐」と名付けた意図が読み取れる。柴田（2012）によれば、「権」という文字は、律令制下では「ゴン」と呼び、「仮の」という意味を表し、「権大納言・権中納言」を始めとして下位の官職にまで広く使われていたという。また、かつお（2015）によれば、そもそも「権」という名称は、古くから役所の官職名として敬意を込めて用いられた反面、下男を権助、仲仕や人足を示す権蔵など働き手として使われてきたという。こういった言葉や漢字の由来などについて、南吉は古典や漢文に長けていたことから、「権」の持つ意味を十分に理解していたと考えられる。その一方で南吉の本当の名は「正八」といい、律令制における正八位を連想させる（柴田 2012）。律令制においては、正八位はかなり下の位である。無口な南吉の中学時代の数少ないエピソードとして伝えられている「おれは、正八だから、お稲荷さん（狐）には勝てないなあ、だって向こうは正一位（お稲荷さんの位）だもなあ」と友人に自虐的に述べたことは興味深い。柴田（2012）は、「自らを正八位に位置付けた南吉は、現実と志の間で宙づりになった現在への自覚の中で『権狐』を書いた。才能を自覚し、しかもあるべき姿になり得ない『正八位』の自分を『権』に過ぎないキツネに重ねて物語を紡いだのではなかったか」と論じている。ここに南吉の文学者としての成功への憧憬やまだ何者にもなっていない不遇な自身を重ねてこの題名を思いついたとも考えらなくもない。

いずれにせよ南吉は、権狐の名称についての由来については特段何も語っていないので、今のところ決定的な根拠はなく、まさに「諸説有り」なのである。

蛇足になるが、南吉の原作「権狐」を容赦なく添削した鈴木三重吉は、まずは原作者が「ごんぎつね」と読ませたいのなら、平仮名の方が相応しいとばかりにあっさり題名を「権狐」から「ごん狐」に変更してしまったのはよく知られた話である。

5. ごんぎつねは、いつころ、どこのお話か。

ごんぎつねの学習が始まると、この物語の時代と場所については、4年生であっても必ず質問してくる子どもはいる。教科書の冒頭の文では、「これは、わたしが小さい時に、村の茂平というおじいさんから聞いたお話です。昔は、私たちの村の近くの中山という所に、小さなおしろががあって、中山様というおとの様がおられたようです。その中山から少しはなれた山の中に、『ごんぎつね』というきつねがいました。」と記されているだけである。しかし、その短い文から子どもたちは、色々想像を巡らせる。

登場人物の挿絵からは「お侍の時代かな」と述べたり、物知りな子が「お殿様がいた頃だから、江戸時代だよ」といったりするが、もちろん、それ以上のことは分からない。

一方、草稿の冒頭は「茂助というおじいさんが、私たちの小さかったとき、村にいました。『茂助じい』と、私たちはよんでいました。茂助じいは、年とっていて、仕事ができないから、子守りばかりしていました。〈若衆倉〉の前の日だまりで、私たちはよく、茂助じいと遊びました。私はもう、茂助じいの顔を、おぼえていません。ただ、茂助じいが、夏みかんの皮をむくときの、手の大きかったことだけ、おぼえています。茂助じいは若いとき、猟師だったそうです。わたしがつぎにお話するのは、私が小さかったとき、若衆倉の前で、茂助じいからきいた話です。むかし、徳川さまが世をお治めになっていられたところに、中山に小さなお城があって、中山さまというお殿さまが、少しのけらいと住んでいられました。そのころ、中山から少しはなれた山の中に、ごんぎつねというきつねがいました。」とかなり詳しく記述されている。

二つの文を比較してすぐに分かることは、昔というのは、徳川の時代、つまり江戸時代であり、領主の中山様は小さな大名であることだ。佐藤（1970）は「教科書に掲載されているごんぎつねは、南吉が物語の発端として、話をしてくれた茂助じいの思い出を描いた部分はすべて削除され、『これは、わたしが小さいときに村の茂平というおじいさんからきいたお話です』の一言でかんたんに片付けている。全体のバランスを考えたら茂助じい自体の差し入った説明は蛇足であり、三重吉は一刀両断にふしている」と述べているが、南吉の草稿をもし並行読書で扱えば、子供の疑問の一つは解けたことになる。

場所については、江戸時代の中山城主と南吉の生まれ故郷の知多郡半田市にある権現山付近であることからすぐに特定できる。有田和臣（2015）によれば、「ごん狐が棲むと思われる権現山（五郷社の森）は領主が管理する『御林』に準ずるもので『中山様』の保護下にある。また、『権狐』で語られた『若衆倉（宝蔵倉）前の広場は八幡社の境内であり、中山様の城（岩滑城）のお膝元である』ことが分かるのである。」と述べている。

著者は一昨年、実際に新美南吉の生家及び新美南吉記念館を訪ねた。そこでは兵十が張り切り網を仕掛けた川から権現山を一望できたと同時に、当時の地理的風景やそこに暮らす村人たちの生活の様子が自然と目に浮かんできた。おそらく、明治の権現山付近は、江戸時代の風景をまだ色濃く残していたものと考えられるため、物語を創作していくにあたって南吉の想像力は掻き立てられたに違いない。

6. ごんは、なぜ一人ぼっちでいたずら好きなのか

子どもたちに「ごんぎつねは、どんなきつねかな」と尋ねると、多くの子どもは、「子供のきつね」「ひとりぼっちのきつね」「いたずら好きのきつね」などと答える。「ひとりぼっちの小さなきつね」と明記されているように、体は小さいが生まれたばかりの子狐ではないと一般的に解釈されている。しかしながら、夜でも昼でも「畑に行って芋を掘ったり」「菜種がらに火をつけたり」「百姓家のせど（裏手）につるしてあるとうがらしをとってきている」の記述どおり、かなりの悪戯ぎつねであることは間違いない。いたずらは子供の専売特許と考えるなら、ここは子供の狐と解釈することもできる。しかしながら、子供に議論させる必要はない。いくら読み進めても答えが出そうもない、「小さいきつね」か「子どものきつねか」の二者択一的な議論は無意味であるからだ。あくまで、教師の素材研究の一環として頭の隅に入れておく知識として留め置くのが妥当であろう。

それを踏まえた上で、子狐説を追究してみよう。一般的に狐の出産は3月上旬とされている。畑に

芋が実るのは、8月下旬以降であるから、このとき、ごんは生後5ヶ月ということになる。安藤重和(1988)は「権狐」成立論の中で、「子狐は生後25週頃に成獣の大きさになり、体重は満たないが8月末頃には成獣の大きさになる」ことを指摘している。体長は成獣並みになったとしても生後半年あまりの狐であることが考えられる。また、安藤(1988)は有能な猟師として知られ、野生動物の具体的な生態にも詳しい生田光義氏にインタビューし①狐の出産は3月頃であること②仔狐の成長は極めて早く7月頃には親と殆ど同じ大きさになっていること③八月中旬頃には兄弟狐はバラバラになって単独行動していることなどの答えを得て、この時期「一人ぼっち」な狐は、ゴンだけではないのだから「南吉は野生の狐の生態にあまり詳しくないのでは」と指摘している。

しかしながら、守山弘(2007)によれば、「狐の子どもは大きくなったあと、メスの子供は母親のもとに残り、次の年に母親が生んだ子どもの世話をする。こうした狐をヘルパーと呼ぶ。そしてオスの子供は、秋に親元を離れ一匹で生活する」のだという。したがって、村はずれにすむ子狐ごんは、前の年に生まれたと主張している。ただ、筆者は「小さなきつね」の表現から、成獣になってはいるが個体差として小さいか、成獣のように、十分腹を満たすほど餌を得られていないのではないかと考える。まだ、餌の獲得がうまくいかないから、芋をほったり、つるしてあるとうがらしとってきたり、人間からみれば悪さをしているようにみえたのかもしれないと考えるからだ。

また、「菜種がらに火をつけた」表現に対して安藤(1988)は、「南吉は、余程狐の生態に詳しいのかと思うと、その直後に全くデタラメの描写が続くというこの奇妙な現象には注意が必要だ」と述べている。だが、菜種がらは、種子が熟したアブラナから菜種をはたき落とした茎の部分であり、燃えやすいので、かまどに火をつける時にたきつけにした(守山2007)ほどであるから、例えば、当時頻繁に行われていた野焼きの火が燃え移ったとも考えられる。したがって、ごんは、あらぬ濡れ衣を着せられた可能がないとはいえない。また、一般的に肉食獣である狐が、芋を掘って食べるか否かについては、山に近接した畑に栽培されている薩摩芋を狐が掘って食べることが目撃されるため実際にあると言われている。

その一方で、守山(2007)は、「ハタネズミは畑に穴を掘り、芋などを食べるため、ごんが畑に入って掘り散らかすのは、いも畑に穴を開けるハタネズミを掘り出すためだったのでは」と疑問を呈している。実際、かつて狐は稲荷神の使いとして里に下りてきてネズミを捕ってくれた有難い存在だったという。

教材研究や素材研究は、子供にとって分かりやすい授業を目指すものだが、副次的には、教師自身が作品中の謎や物語の背景を楽しむことが出来るものでもあると言える。

7. ごんぎつねに出てくる動植物

ごんぎつねの冒頭から、子どもたちにはあまり馴染みのない動植物がいくつか出てくる。

主なものは「しだのいっばいしげった森」「菜種がら」「とんがらし」「もずの声がきんきん」「川べりのすすきや、はぎのかぶ」「しばの根」「太いうなぎ」「おおきなきす」「はんの木の下で」「いちじくの木のかげで」「ひがん花が赤いきれのように」「麦をといで」「いわしを売る声」「山でくりをどっさり」「松たけを二、三本」「松虫が鳴いています」などである。

南吉の研究者の間では、中でも「ごんは、ひとりぼっちの小ぎつねで、しだのいっばいしげった森の中のに、あなをほって住んでいました」の一文に疑問を投げかけられることが多い。

草稿の権狐と比較してみよう。南吉のスパルタノートに記されている草稿では「権狐は、一人ぼっちの小さな狐で、いささぎの一ぱい繁った所に、洞を作って住んでいました」とある。つまり、いささぎが三重吉の添削ではシダに変えられているのである。東京農業大学の守山（2007）は、生態的に言えば、シダのしげるような湿ったところにキツネがすみかを作るのは考えにくいと指摘している。また、かつお（2015）は、三重吉はいささぎがどのような植物か知らずに、きっと狐が棲むところを決める時の第一条件は、猟師や狼などに見つからないこんもり繁った草むらの陰だろうと考えて、「シダ」に書き直したのではないかと指摘している。

しかしながら、シダは一般的に水気のある所を好むから狐の棲みかにぴったりとは言い難く、この地区で狐が棲かとするのは、イササギことヒササギという常緑広葉樹の陰だという見方もある。一方、もしそれでもシダだと言うのなら、守山（2007）は「このシダはコシダということも考えられる。コシダはアカマツ林の林縁などや開けた林など、乾燥地でも群生するからだ」と補足している。

いずれにしろ、三重吉の「ごん狐」の添削は、文脈や文章の流れなど洗練さを優先しているため、権現山付近の動植物の生態はある程度無視していたのかもしれない。ちなみに、ごんがせっせと運んできた松茸は、そもそも知多半島には、松茸が生える母床となる赤松そのものがないと言われているので、南吉は松茸を見たことも食べたこともなかっただろう。それゆえ、三重吉のこの部分の添削で、「栗や木のこ」を「栗や松たけ」に変えられた南吉は、腑に落ちなかったかもしれない。

兵十がはりきり網で捕った大きなキスという魚は、もちろん主に日本の沿岸部に生息する海洋魚のキスではない。かつお（2015）によれば、ここ知多半島では、上流の水がきれいな所に棲むハヤ（一般的にはウグイのこと）をキスと呼ぶのだという。また、古くからの地元住民である江端兵重氏も秋の大雨直後に背戸川へ行き、上流から押し流されてくる、よく太ったウナギやキスを取っていたというから、主人公の兵十がそれを生業にしてはいないまでも、生活の糧の一つにはしていたに違いない。また、ごんがウナギを川に捨てた後に逃げかえった洞窟近くに生えている「はんの木」は、日本では全国の山野の低地や湿地、沼に自生するが、ここ権現山にもよく生えている木の一つだという。ただ、湿地ではなく、山に生えていることから近縁種の山ハンノキの可能性もある。

「いちじくの木のかげで」の無花果（いちじく）は、江戸時代初期に渡来したと言われているが、当初は薬樹としてもたらされたという。やがて挿し木で容易にふやせることも手伝って、手間のかからない果樹として明治、大正のごく一般の家でも果実を生食して甘味を楽しむようになったというから、当時の農家の庭先に植えられていても不思議ではない。

しかも、葉っぱが大きくこんもりしているので、その陰に隠れて女房が、「おはぐろに染め直す」ことはよくあったのだろう。

ごんぎつねを教材化し単元構成する場合、上記で説明した動植物は、おそらく教師は素通りするか、仮に子どもから質問が出たとしても、敢えて取り合わない場合が多いのではないだろうか。しかしながら、草稿の「権狐」を並行読書として単元に位置付けた場合は、その違いから、「どうして（いささぎ）が（シダ）に変わってしまっているのですか」「きつねは、じめじめしたところには巣をつくらないのではないですか」などの疑問をもつ子供はいるかもしれない。また、北海道の子供であれば、イチジクや松虫は実際には見たことがないだろう。昭和ばかりか平成の世ですら終わりを告げた令和時代を生きる子供たちには、大正・明治・江戸時代の物語であるならば、少なくとも写真等で補足していく必要はあるだろう。

8. 子供に説明が必要な言葉

ごんぎつねが執筆された大正時代の子供であれば、説明がなくてもすぐにわかる言葉も、現代の子供には想像すらできない言葉が、「ごんぎつね」にはいくつかある。おはぐろ・背戸・赤い井戸・のぼりなどである。

この場面に出てくる「お歯黒」は、女性が結婚するとそれ以後生涯自分の歯を黒く染めなければならないという、江戸時代に全国で行われていた風習であり、熟成した黒茶色のドロツとした液を定期的に塗り直すほか、結婚式やお葬式など特別な行事の時も塗り直すことになっていた（かつお 2015）ので、弥助の妻も兵十の母親の葬式に向かうために塗り直していたことが推測できる。また、子どもは井戸という言葉を知っていて実際に見たことがあったとしても、赤い井戸は見たことはないのではないか。かつお（2015）によれば、兵十の家だけ独自に着色していたわけではなく、この辺りの民家でよく用いられている茶褐色をした一見素焼きのような土器で出来た井戸枠のことで、南吉の養子先だった岩滑新田の新美家でもこの赤い枠の井戸が正面左脇に作られていたという。南吉がこの物語を書いている時、実家を含め、まだ江戸時代の風情が残る近隣の家々をイメージしながら描写していったことは想像に難くない。

9. 白い葬列がイメージできるか

教科書の「ごんぎつね」の中で、もっとも色彩を感じるのは2の場面である。「弥助の家内が、おはぐろをつけていました」「表に赤いいどのある」「表のかまどで火をたいています」「おしろの屋根が光っています」「ひがん花が、赤いきれのようにさき続いていました」「白い着物を着た葬列の者たちが」「ひがん花がふみ折られていました」「白いかみしもを着けて」「赤いさつまいもみたいな元気のいい顔が」など、赤、白、黒などの色彩が感じとれる。

中でも時々、映画などで見ることがある農村部の葬列の様は、もちろん子供たちには全くイメージできないであろう。したがって、もしこの様子を知りたがる子どもがいたら、写真か映像で補足する必要がある。白いかみしもを着けた兵十が位牌を下げている場面は、光村4年下では影絵のように表現され、教出4年下では遠景として描かれているので好奇心の強い子供であればもっと詳しく知りたいと思うかもしれないからである。かつお（2015）によれば、知多地方では喪主は教科書に記述されている通り白い木綿の袴を着て、白布を巻いた草鞋を履き、白い布の鉢巻で三角形の和紙を額に結び付け、位牌を両手で胸の前に立てて持ち、住職に続く葬列の先頭に立つという。おそらく兵十の姿をイメージできたなら、子どもは「あっ、昔の幽霊だ！」と叫ぶかもしれない。また、この場面をイメージ化しながら話し合っていく過程で、六地藏の陰でその葬列を見守るごんを更に後ろから見ることが出来たとしよう。ちらちらと見え始める白い着物を着た葬列と赤い布のように咲き続けている彼岸花のコントラストは悲しくも美しい情景として子供の心に強く印象付けられるであろう。

10. ひがん花とはどんな花なのか

彼岸花（ひがんばな）の赤は際立っているが、この場面でひがん花を取り上げる授業はあまりない。

しかしながら、この場面は、墓地へ向かうごんが、白い着物をきた村人たちの葬列に出くわし、自分のせいで兵十の母を死なせてしまったと思い込み、贖罪の行動に向かう分岐点となった場面である。彼岸花を死の象徴と捉えるなら、色を感じさせながら読み進めていくことは重要であろう。ぜひ丁寧

に扱ってほしい場面である。

半田市では、毎年9月中旬から10月上旬にかけて「ごんの秋祭り」が開催される。1990年、子どもの頃南吉と遊んだ経験がある小栗大造氏が、「南吉がよく散策していた矢勝川（背戸川）堤をキャンパスに、彼岸花で真っ赤な風景を描こう」と決意し、「ごんぎつね」に登場する彼岸花の球根を植栽したのが始まりだといわれている。現在矢勝川堤には2kmに渡って約300万本の真っ赤な彼岸花が咲き広がるという。

「墓地には、ひがん花が赤いきれのように咲いていた」という一文が印象的だが、ひがん花の鱗茎には毒があるため、それをかじったネズミは死んでしまうこともある（守山 2007）ということだから、墓をネズミに食い荒らされないように昔は墓地の周りによくひがん花を植えたのである。ちなみに、彼岸花の名の由来は、「秋の彼岸ごろから開花する」「これを食べた後は「彼岸（死）」しかない」「毒を抜いて非常食とすることもあるので悲願の花とした」の3つの説がある。一方で、かつては日本中どこにも生息していたホンドキツネ（アカギツネ）は、現在はほとんど見られなくなっているという。したがって、北海道の子供であれば、少なくとも一度はどこかでキツネの歩き回る様子を見たことがあるだろうから、ごんとキタキツネを重ね合わせて、イメージしやすいのではないかと思われるが、本州の子供たちは動物園や映画などのシーンでしか、きつねを見ることが出来なくなってきたようだ。

そのせいで、国語の授業においても、子どもばかりではなく教師自身がこの物語を現実感に満ちた文学作品と見ようとせず、単なる道徳教材のように読み取らせる傾向が強くなったとも言われている（かつお 2015）。ホンドキツネが姿を消したのは、キツネが最も常食としている野ネズミを一掃するために撒布された農薬を摂取した野ネズミを食べたからだと言われている。野ネズミ以上に農薬はキツネに致命的に作用したのである。かつて彼岸花が植えられたのは、野ネズミから墓地や田畑を守るためだったが、その野ネズミがいなくなるとキツネもまた人里からその姿を消していったのは皮肉な話である。

11. 兵十の家には鉄砲があるが獵師なのか

教科書の書き出しに登場する村の茂平じいさんは、どんな職の人物であったかは読み取れない。だが、新美南吉の「スパルタノート」に残された「ごん狐」の元原稿とされる「権狐」には、語り手の茂助爺（「ごん狐」では「茂平というおじいさんに」変更されている）が、「若い時、獵師だったそうです」と明示されている。だから兵十もまた獵師だったとみれば一応の筋は通る（有田 2014）。おそらく、草稿を読んだ者はそう考えるだろう。なぜなら、兵十が仮に農民であるならば、家の納屋に火縄銃を無造作にかけているはずはないからだ。

しかしながら、この物語が江戸時代と仮定すると、歴史に多少なりとも関心のある者であれば幕府の武器・銃器の取り締まりは非常に厳しいものであったろうと先入観をもっていてもおかしくはない。秀吉の刀狩りをはじめ、徳川幕府は厳しく銃器を取り締まっていた事実があるからだ。

一方で、有田（2014）は、必ずしも獵師でなくとも、火縄銃を常備する農民はいたと主張する。有田（2015）によれば、兵十が持っていたのは、農民に所持と発砲が許された、「四季打鉄砲」と呼ばれる火縄銃の可能性が高いという。この四季打鉄砲は獵師のみに所持が許された「獵師鉄砲」とは異なり、農民が、田畑を荒らす害獣駆除のために、四季を通じて使うことを許された鉄砲を指す（有

田 2014)。「権狐」の描かれた時代は、おそらく茂助爺が若い頃に伝え聞くか見聞きするかし得た話だとすると、幕末から多少さかのぼる時代であろうと推測される。塚本学(1983)によれば、秀吉による刀狩令以来、特に17世紀以降の農村には、武士層が持つ数をはるかに上回る数の鉄砲所持が常態として見られたという。

また、有田(2015)は、江戸時代末期は、農地拡大とそれに伴う害獣駆除のために領主が農民に銃の所持を許可していたことを歴史的記録から示している。実際、当時城の武器庫にある火縄銃よりも村の家々にある火縄銃の総数の方が多かったという記録もある。つまり、江戸時代後期には、害獣駆除用の鉄砲は、各村々の家に普通にあったわけである。

12. おわりに

来年度から学習指導要領が変わり、教科書内容が一新されるが、「ごんぎつね」の教材は残るようである。現在の教育出版の教科書では「ごんぎつね」の学習目標は「登場人物の行動や気持ちを想像しながら読みましょう」となっており、一方の光村図書教科書では「登場人物の行動や気持ちの変化をとらえ、感じたことや考えたことを話し合しましょう」となっている。しかしながら、従来の国語科指導によく見られたワンパターンの読み取り重視の授業では、これから求められる主体的、対話的で深い学びにはならないであろう。子供たちが、記述されている言葉に敏感となり、知的好奇心を喚起しながら、登場人物の行動や心情の変化を感じ取っていかなくてはならないからだ。そのためには、素材研究を十分に行った上で、言語活動を工夫し、例えば「ごんと兵十の関係が接する場面で際立つ色彩に注目し、イメージを膨らませる授業」や「記述されている言葉を手掛かりに、ごんや兵十の住む里の地図作りをしながら行動変化を読み取っていく授業」など、子どもが主体的に活動し、問題解決するための対話を繰り返していくことで読みを深めていくことが重要である。また、教師は時間的制約があり、ややもすると処理や評価に時間がかかる書く活動を積極的に授業に取り入れられない傾向があると言われているが、深い学びには書く活動が不可欠である。書く活動を通して子供は想像したり、思考したりしながら理解を深めていくからである。

物語教材においては、どのような言語活動を単元構成の中に位置付けるにしても、工夫された書く活動と子供が主体的になれる探究活動を有機的に組み合わせた授業づくりが求められるのである。

その一方で、本稿で取り上げたような、あまり授業では取り上げられないような「時代背景、地理的構図、登場する動植物や色彩など」は、授業では軽く扱われるか、全く扱われなかったりしがちだが、教師が物語の素材研究の一環として可能な限り、作者や作品を追究していくことで授業内容に深みが増していくものと考えられる。そしてそれは、子どもの知的好奇心を呼び覚ますことに繋がっていくだろうし、教師にとっても子供の素朴な質問や疑問に余裕をもって答えたり、クラス全体に分かりやすくフィードバックしたりすることが可能となるに違いない。

文献

赤座憲久, 1973, 「新美南吉の『ごんぎつね』」大垣女子短期大学研究紀要 4, 1-18,

安藤重和, 1988, 「『権狐』成立論」愛知教育大学研究報告 37 (人文科学編) pp.172-166

有田和臣, 2014, 「ごん狐はなぜ撃たれたか『権狐・火縄銃・中山様を繋ぐ必然の糸』」京都語文 190-209

- 有田一臣, 2015, 「新美南吉『権狐』と水利権争い」 佛教大学国語国文学会 pp164-187
- 生野金三, 『改稿 新美南吉研究—ごん狐の世界—』 (株) 萌文書林
- 井上修二・近藤章, 2016, 「新美南吉『ごんぎつね』の研究」 豊岡短期大学論集 No.13, pp79-88
- 上田信道, 1998, 「表現上の特性からみた二つの『ごんぎつね』」 国際児童文学館紀要 (通号 13) p.72-88
- 永長さとみ, 1984, 「新美南吉『ごんぎつね』研究」 奈良教育大学国文: 研究と教育 pp48-55
- 小川高広, 2019, 「草稿『権狐』と『ごんぎつね』の比べ読みによる読みの発達」 「国語科学習デザイン」
第2巻第2号 pp55-63
- かつおきんや, 2015, 『ごん狐の誕生』 風媒社トモエ
- 木村 功, 1999, 「新美南吉『権狐』論 権狐からごん狐へ」 『岡山大学教育学部研究集録』 111号
1-10
- 佐藤通雅, 1970, 『新美南吉童話論』 (株) 牧書店
- 柴田哲谷, 2011, 「『権狐』という表題について」 愛知学泉大学・短期大学紀要, (46), 87-92 (2011)
- 巽 聖歌, 1962, 『新美南吉の手紙とその生涯』 (株) 英宝社
- 塚本 学, 2013, 『生類をめぐる政治—元禄フォークロア』 講談社学術文庫
- 鳥越 信, 2019, 『新美南吉童話集 I』 ごん狐「解説」 大日本図書株式会社
- 新美南吉記念館, 2014, 『生誕百年 新美南吉』
- 半田市教育委員会, 1988, 『南吉のふるさと—わたしたちと南吉』
- 半田市教育委員会, 2004, 『新編 新美南吉代表作集』
- 半田市教育委員会, 2014, 『新美南吉生誕 100年 おもいでアルバム』
- 守山 弘, 2007, 「作品の背景となる農村空間と心象世界『ごんぎつね』がいたころ」 食農教育 NO. 53
2007年3月号
- 吉田 弘, 1994, 『ごん狐の誕生—新美南吉の少年時代—』
- 渡辺哲男, 2011, 「ごんはなぜ言葉を話すのか」 滋賀大学教育学部紀要 NO. 61 pp29-40

**Material Study on the Japanese Teaching Aids "*Gongitsune*":
- Comparison and Consideration of Authors and Work Contents to Answer Children's Questions -**

MORITA Hiroyuki

Abstract: All of Niimi Nankichi's "*Gongitsune*" is now all published in the 4th grade Japanese language textbooks of elementary schools, and many lesson practices are being carried out.

However, the "*Gongitsune*" lessons in textbooks are not the same as the official draft of "*Gongitsune*".

The reason is that the textbook "*Gongitsune*" is almost the same as "*Gongitsune*" which was greatly modified by Miekichi Suzuki.

In this paper I compared and examined these three works, focusing on the simple questions by the children, and discussed the material study required for teachers.

I also discussed the story of Niimi's birthplace and the local tradition and history of Iwaname, Handa City, Aichi Prefecture, where he was born and raised.

Keywords: Niimi, Nankichi, material study, parallel reading, language activities